

【特集】東日本大震災 ～被災地における支援活動の体験～

4. 東日本大震災で被災した地域での鍼灸治療ボランティア活動

村上 高康

九州看護福祉大学看護福祉学部鍼灸スポーツ学科

【要旨】 今回、著者は（社）全日本鍼灸マッサージ師会のボランティアとして地震・津波の被害が大きかった岩手県釜石市で鍼灸治療ボランティア活動を行った。著者が治療を担当した「シープラザ釜石」では、3日間で9名（男：5名、女：4名 平均年齢40.9±8.4）に施術を行った。延べ人数は15名であった。訴えた主訴は肩痛5名、腰痛2名、膝痛1名、足底痛2名（重複あり）であった。鍼灸治療やマッサージを行うと、「楽になった」「動きが良くなった」という感想をいただいた。鍼灸師等が個人で治療ボランティアを行うことは、余震が続き現地の物資も不足する場合、ボランティア自体にとっても危険なことであり、参加すべきでないと考えた。鍼灸治療は大きな医療器具などを使わず治療することができる。しかし、こういった環境の中では人体に鍼を刺入又は灸による熱刺激がもたらす化膿予防の為に消毒を十分に行う必要があると思われた。また、避難所での施術はプライバシーの保護や寒さ対策が難しいことが分かった。今回、著者が施術したのはすべて市職員の方々であった。過去の鍼灸治療ボランティアの報告は避難した市民に対するものが多かったが、彼らもまた被災者であり、行政担当者や警察、消防、自衛隊等で仕事をする方々をボランティア治療の対象に含むべきと思われた。今後、震災時の活動記録をまとめ、災害時ボランティアマニュアル作成が急務と考える。

キーワード：東日本大震災 鍼治療 灸治療 ボランティア 釜石市

はじめに

今回、著者が鍼灸ボランティア活動を行った岩手県釜石市は沿岸部にあり、地震・津波の被害が大きかった地域である。地震発生から約2ヶ月経過した5月5日時点では、市内に3609人の方が避難所生活を送っておられた。避難所では多くの方々が被災により心身の疲労を訴えていることが予測されていた^{1,2)}。

ボランティアの参加にあたって、（社）全日本鍼灸マッサージ師会HPで公募されていたボランティア募集に登録した。著者が主に活動したのは「シープラザ釜石」（図1）という施設で、津波により流されてしまった市役所が変わって行政機能を移した場所であった。そこで市職員の方々に施術を行ったので報告する。



図1. シープラザ釜石入り口の様子

活動内容

1. ボランティア参加の準備（図2）

まず、（社）全日本鍼灸マッサージ師会HP (<http://www.zensin.or.jp/>：現在は募集停止) 上からボランティア登録を行った。その後事務局から登録確認の連絡が入り、活動期間・活動場所の受け入れ状況などを確認しながら日程調整を行っ

た。

日程等が決定した後、現地へのアクセス方法の確認、宿泊施設・食料・治療道具の確保、ボランティア保険加入、はり・きゅうに対する損害賠償保険加入手続きをすませ、参加準備完了となった。準備には約2ヶ月を要した。

2. 現地までの道のり

現地までは福岡から空路で東京に行き、東京から盛岡まで運転見合わせを解除直後の東北新幹線盛岡から釜石までJRを乗り継ぎ向かった。現地での活動を考えると自家用車が良かったが、単独参加ということもあり断念した。釜石駅からは徒歩で現地に向かった。

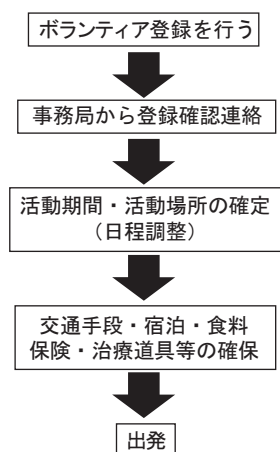


図2. ボランティア登録の流れ

3. 現地に到着して

現地に到着して、すぐボランティア活動の手続きを行った。(社)全日本鍼灸マッサージ師会から派遣されたボランティアの鍼灸師9名で釜石市の避難所に伺い、鍼とマッサージを行うよう指示を受けた。灸治療は体を温める事ができ、まだ肌寒い5月では有効な治療方法と思われるが施術出来なかった。理由は避難所では段ボールでの仕切りのみのため、においが避難所内に充満してしまうことが考えられた。

4. 避難所での治療

著者が担当した「シープラザ釜石」では、3日間で9名(男:5名、女:4名 平均年齢40.9±8.4)に施術を行った。延べ人数は15名であった。訴えた主訴は肩痛5名、腰痛2名、膝痛1

名、足底痛2名(重複あり)であった(図3)。鍼を希望したのは3名で、他の6名はマッサージを希望した。鍼治療を拒否した理由は「鍼は怖そう」、「鍼は痛そう」、「やったことがないから」という理由であった。

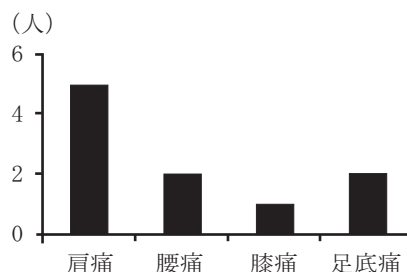


図3. 主訴の状況(重複あり)

鍼治療やマッサージを行うと、「楽になった」「動きが良くなった」という感想をいただいた。

別の治療者が担当した避難所は市民が寝泊まりしている場所なので、一部場所を開放して頂き、簡易施術所を作った。また、寒くないように畳の上に防寒マットを敷き行った。段ボールの高さが足らず、外から施術が見えてしまうのが難点であった(図4)。

避難所には高齢者が多く、全身の痛みや不調を訴える方が多かった。



図4. 避難所での施術風景
プライバシーの確保と温度調節は困難であった。

まとめ

今回、(社)全日本鍼灸マッサージ師会から派遣され岩手県釜石市で鍼灸治療ボランティアを行った。著者はこの団体会員ではないが、参加する事に対して制限がなかったのでボランティア活動を行うことができた。報道等で現地の様子を細かく知ること

は難しかったが、準備段階ですでに多くの鍼灸師が各地で活動を開始しており、現地の状況等が把握出来る環境にあった。また、鍼灸師、あん摩マッサージ師、柔道整復師等が個人で治療ボランティアに突然訪問し、相手が拒否しトラブルになるケースが聞かれた。団体に登録してボランティアをする際は、団体が受け入れ先の社会福祉協議会や市役所等に連絡してコーディネートしているので、このような行き違いによるトラブルは(社)全日本鍼灸マッサージ師会が行った活動の中では報告されていない。また、余震が続く現地の物資も不足した状態で一人現地入りすることは、ボランティア自体にとっても危険なことであり、参加すべきではないと考える。

著者が活動を行った5月初旬は震災直後に比べスーパーマーケットも営業しており、食料や物資の調達には困らなかったが、連休中ということもあり、宿泊施設の確保が最も難しかった。幸い、釜石市内に住むマッサージ業を営む方のお宅に宿泊させていただく事ができた。

鍼灸治療は大きな医療器具などを使わず治療することができる。しかし、こういった環境の中では人体に鍼を刺入又は灸による火傷がもたらす化膿予防の為に消毒を十分に行う必要があると思われた。実際、大規模災害において感染対策は重要である³⁾。

著者が施術したのはすべて市職員の方々であった。主訴は肩痛、腰痛、足痛であった。これは他地域でのボランティア活動報告と同様であった^{4,5)}。彼らは被災時に市役所で勤務中であったが、市役所も津波の影響で損害を受けた。釜石市では市役所だけでなく警察署、消防署等も津波の被害にあい壊滅状態となっており、行政機能が麻痺した状態になって



図5. 4月下旬釜石市内の様子
家屋の倒壊により瓦礫が道路脇に寄せられている状態がどこまでも続いていた。

いた(図5)。

しかも自分の家が津波によって流されたり、知人を亡くしたりしている方ばかりの中、1ヶ月殆ど休みが無い状態も珍しくはないようであった。また中には家に帰らず、ずっと災害対策本部で寝泊まりをしているという方もいた。

ボランティア期間中には安否確認に訪れる市民や罹災証明書の発行などを待つ市民で施設はあふれていた。自分も被災者であるはずの市職員の方々は、自分の疲れも見せず任務を全うされていた。

過去の鍼灸治療ボランティアの報告は避難した市民に対するものが多かった^{2,4-6)}。今回、市職員の方々に施術をする機会を与えていただいたが、身体的・精神的ケアを必要としているのは被災された方のみならず、行政担当者や警察、消防、自衛隊等で仕事をする方々を含むべきと思われた。今後、震災時の活動記録をまとめ、災害時ボランティアマニュアル作成が急務と考える。

おわりに

東日本大震災で被災した釜石市で鍼灸マッサージボランティア活動を行った。活動には団体行動が必要であり、個人行動は控えるべきである。また、治療の際には感染症に対する対策を十分に行う必要がある。被災住民だけでなく、救助活動に参加している人々にも治療が必要だと思われる。災害時ボランティアマニュアルの作成が必要だと考えた。

謝辞

ボランティア活動をコーディネートしてくださった(社)全日本鍼灸マッサージ師会、現地で宿泊施設を提供してくださった釜石市在住の佐々木きみ子様に感謝申し上げます。

文献

- 1) 石井百雄ら.鍼灸ボランティア～阪神淡路大震災の教訓は新潟中越大地震でどう生かされたか～.医道の日本.2005; 64(2):11-23.
- 2) 生江毅.鍼灸マッサージボランティア活動について. 医道の日本.2005;64(1):208-212.
- 3) 高山義浩. SECOND 震災被災地における感染症と感染対策.月刊保険診療.2011;66(6):52-55.
- 4) 高崎雷太,大月隆史.宮城県気仙沼総合体育館における鍼灸ボランティア活動報告.

医道の日本. 2011;70(7):94-96.

5) 藤井正道ら. 鍼灸マッサージで震災ボランティア

【宮城県塩竈市・浦戸諸島での活動報告】.中医臨床. 2011; 32(2): 312-317.

6) 栢之間理沙.震災ボランティア活動記.

医道の日本. 2011; 70(6): 109-111.